

10:1 イエスは、そこを立って、ユダヤ地方とヨルダンの向こうに行かれた。すると、群衆がまたもみもとに集まって来たので、またいつものように彼らを教えられた。 10:2 すると、パリサイ人たちがみもとにやって来て、夫が妻を離別することは許されるかどうかと質問した。イエスをためそうとしたのである。 10:3 イエスは答えて言われた。「モーセはあなたがたに、何と命じていますか。」 10:4 彼らは言った。「モーセは、離婚状を書いて妻を離別することを許しました。」 10:5 イエスは言われた。「モーセは、あなたがたの心がかたくななので、この命令をあなたがたに書いたのです。 10:6 しかし、創造の初めから、神は、人を男と女に造られたのです。 10:7 それゆえ、人はその父と母を離れ、 10:8 ふたりは一体となるのです。それで、もはやふたりではなく、ひとりなのです。 10:9 こういうわけで、人は、神が結び合わせたものを引き離してはなりません。」 10:10 家に戻った弟子たちが、この問題についてイエスに尋ねた。 10:11 そこで、イエスは彼らに言われた。「だれでも、妻を離別して別の女を妻にするなら、前の妻に対して姦淫を犯すのです。 10:12 妻も、夫を離別して別の男にとつぐなら、姦淫を犯しているのです。」 10:13 さて、イエスにさわっていただくとして、人々が子どもたちを、みもとに連れて来た。ところが、弟子たちは彼らをしかった。 10:14 イエスはそれをご覧になり、憤って、彼らに言われた。「子どもたちを、わたしのところに来させなさい。止めてはいけません。神の国は、このような者たちのものです。 10:15 まことに、あなたがたに告げます。子どものように神の国を受け入れる者でなければ、決してそこに、入ることはできません。」 10:16 そしてイエスは子どもたちを抱き、彼らの上に手を置いて祝福された。 10:17 イエスが道に出て行かれると、ひとりの人が走り寄って、御前にひざまずいて、尋ねた。「尊い先生。永遠のいのちを自分のものとして受けるためには、私は何をしたらよいのでしょうか。」 10:18 イエスは彼に言われた。「なぜ、わたしを『尊い』と言うのですか。尊い方は、神おひとりのほかには、だれもありません。 10:19 戒めはあなたもよく知っているはずですが、『殺してはならない。姦淫してはならない。盗んではならない。偽証を立ててはならない。欺き取ってはならない。父と母を敬え。』」 10:20 すると、その人はイエスに言った。「先生。私はそのようなことをみな、小さい時から守っております。」 10:21 イエスは彼を見つめ、その人をいつくしんで言われた。「あなたには、欠けたことが一つあります。帰って、あなたの持ち物をみな売り払い、貧しい人たちに与えなさい。そうすれば、あなたは天に宝を積むことになります。そのうえで、わたしについて来なさい。」 10:22 すると彼は、このことばに顔を曇らせ、悲しみながら立ち去った。なぜなら、この人は多くの財産を持っていたからである。 10:23 イエスは、見回して、弟子たちに言われた。「裕福な者が神の国に入ることは、何とむずかしいことでしょうか。」 10:24 弟子たちは、イエスのことばに驚いた。しかし、イエスは重ねて、彼らに答えて言われた。「子たちよ。神の国に入ることは、何とむずかしいことでしょうか。 10:25 金持ちが神の国に入るよりは、らくだが針の穴を通るほうがもっとやさしい。」 10:26 弟子たちは、ますます驚いて互いに言った。「それでは、だれが救われることができるのだろうか。」 10:27 イエスは、彼らをじっと見て言われた。「それは人にはできないことですが、神は、そうではありません。どんなことでも、神にはできるのです。」 10:28 ペテロがイエスにこう言い始めた。「ご覧ください。私たちは、何もかも捨てて、あなたに従ってまいりました。」 10:29 イエスは言われた。「まことに、あなたがたに告げます。わたしのために、また福音のために、家、兄弟、姉妹、母、父、子、畑を捨てた者で、 10:30 その百倍を受けない者はありません。今のこの時代には、家、兄弟、姉妹、母、子、畑を迫害の中で受け、後の世では永遠のいのちを受けます。 10:31 しかし、先の者があとになり、あとの者が先になることが多いのです。」

はじめに

これまで約 15 ヶ月間、聖餐式に与る第一週にマルコの福音書を学んできました。このシリーズは月に一度のペースで進みますので、トータルでおそらく 2 年ほどかかるでしょう。この数か月の学びでは、イエスが弟子たちに、ご自身の死と復活について教えはじめられたことがわかりました。(8 : 31、9 : 31)

弟子たちは、イエスのおっしゃっていることがよくわかりませんでした。それは、弟子たちの考え方とイエスの考え方にギャップがあったからです。イエスは、身近にいる弟子たちに大切なことを教えようとなさっていましたが、彼らにはその意味が伝わりませんでした。彼らが描いていたのは、苦しむことのない、勝利の救い主なる王です。けれども、救いようのない絶望的な状態の人間のために、イエスは死なねければなりません。イエスはまた、犠牲を払って弟子として生きることについても教えられました。イエスが彼らのために死んでくださるのなら、彼らも死ぬ覚悟でなければなりません。

マルコ 8 : 34-38

8:34 それから、イエスは群衆を弟子たちといっしょに呼び寄せて、彼らに言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。 **8:35** いのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしと福音とのためにいのちを失う者はそれを救うのです。 **8:36** 人は、たとえ全世界を得ても、いのちを損じたら、何の得がありましよう。 **8:37** 自分のいのちを買い戻すために、人はいったい何を差し出すことができるでしょう。 **8:38** このような姦淫と罪の時代にあって、わたしとわたしのことを恥じるような者なら、人の子も、父の栄光を帯びて聖なる御使いたちとともに来るときには、そのような人のことを恥じます。」

イエスは、犠牲の伴う生き方がイエスに栄光をお返しする生き方であると弟子たちに教えようとなさっていました。

弟子たちは、誰が一番偉いかと言って、地位や権力にこだわっていました。

これまでイエスは、いくつかの例を挙げて、神の御国に入るために求められる弟子の姿を示してこられました。

1. 祈りによって完全に主に依り頼む。—マルコ 9 : 29
2. 相手がだれであっても謙虚に仕える。—マルコ 9 : 33-37
3. 罪が深刻であることを悟る。弟子として困難な道を歩むことを拒んだ際に伴う厳しい結果を悟る。—マルコ 9 : 42-48
4. イエスの働きを推し進めるために未信者をも用いられる神の摂理と主権を信頼する。—マルコ 9 : 38-41

10章では、これらのテーマがさらに掘り下げられます。

10章の学びに入る前に、8-9章でイエスが弟子たちに教えようとなさっていたことから、私たちに役立つ教えを導き出しましょう。

適用

弟子たちは、弟子の条件をはっきりと理解していませんでした。

今日でも、多くのクリスチャンがこれらの条件を理解していません。

OICでは、弟子訓練のプログラムがあります。

弟子訓練における親役の人たちが、弟子の条件を理解し、霊的成長を遂げられるようお手伝いしています。

弟子訓練の生徒として学んでいる人たちが弟子となることについてしっかり理解できるようお手伝いするのです。

イエスは教えの詰まった短い言葉で、弟子となるとは自己否定の生き方であり、犠牲をいとわずイエスの軌跡をたどることであると、教えておられます。

真のクリスチャンには、3つの敵がいます。それは、この世、肉、そして悪魔です。

人は、この世の流れに乗り、その基準に迎合します。

一方、キリストの弟子はそうではありません。

キリストの弟子はイエスの道に従うのであって、この世の流れには乗りません。そこには、イエスに人生を明け渡すという固い決意が必要です。そして日々、明け渡していくのです。

私たちが本物の弟子となることを誤解しないようにと願います。

本物の弟子となることは命懸けですが、十分その価値があります。

キリストの弟子となることについて、私たちは明確な意識を持たなくてはなりません。

では、10章 1-31節の学びに入りましょう。

この部分を3つに分けることができます。

1-12節で、イエスは頑なな心の危険性を教えられます。

13-16節では、謙虚な心の必要性を教えられます。

そして、17-26節では、私たちの内側で神に大きく働いていただく必要があることを教えられます。

1. 頑なな心の危険性 (1-12節)

一読した限り、イエスの教えは離婚についてのように見えます。

しかし、その奥に隠れているのは人間の頑なな心の問題です。

弟子訓練のこの時点で離婚について取り上げる理由はイエスにもマルコにもありませんでした。

ですから、この奥に隠された弟子訓練での問題点を理解するために、離婚というテーマにあまりとらわれすぎないようにしましょう。

イエスは、新たな土地に移動されました。

そこは、ヨルダンの向こう側のユダヤ地方でした。

イエスは、大群衆に向かって教えておられました。

すると、パリサイ人がイエスを試そうとして質問し、教えを中断させました。

その質問は、「夫が妻を離別することは許されるかどうか」というものでした。

イエスが何と答えられたかに話を進める前に、この時の状況を理解する必要があります。

まず、ユダヤ教にはふたつの派閥がありました。パリサイ人は、モーセの律法によると、どんな理由であれ不満があれば離婚が許されると信じていました。

もうひとつのユダヤ教の派閥は、不貞があった場合のみ離婚が可能だと信じていました。

そして、当時の国主ヘロデ・アンティパスは不貞を働いていました。

ですから、イエスがどのように答えても、それを不服に思う人がいたわけです。

イエスは、「モーセはあなたがたに、何と命じていますか。」と答えられました。つまり、聖書は何と言っているかというわけです。

パリサイ人は答えました。「モーセは、離婚状を書いて妻を離別することを許しました。」

モーセは、200万人を超える人々をまとめる大役を任されていました。

ですから、家族を基盤とするユダヤ民族が減じる危険性のある行為を規制しなければなりませんでした。

モーセはおそらく、事態が改善し、人々が神のもとものご計画に心を開くことを願っていたでしょう。

イエスは、彼らがそれまで見落としていたことに目を開かせようとなさいます。

彼らは、一番重要な問題を見落としていました。

ここで一番重要な問題は、モーセが離婚を許可した理由と、頑なな心との関連性です。

天地を創造されたとき、神は離婚をお許しになろうとは思っておられなかったでしょう。

人間が結婚したら一生そのままのことが神のみこころでした。

人間が結婚に失敗したから、モーセは別居や離婚の制度を採り入れなければならなかったのです。

パリサイ人やユダヤ人の文化はこの制度を乱用し、離婚をあまりにも手軽なものにしていました。

公式文書を一筆書いて、役人に判を押してもらいさえすれば、妻を離別できるのです。

これはあまりにも手軽で、男性にすべての権限を与えるものでした。

後に、イエスは弟子たちとある家にいました。すると弟子たちが同様の質問をしました。これに対し、イエスは11-12節で次のように答えておられます。

10:11 そこで、イエスは彼らに言われた。「だれでも、妻を離別して別の女を妻にするなら、前の妻に対して姦淫を犯すのです。10:12 妻も、夫を離別して別の男にとつぐなら、姦淫を犯しているのです。」

イエスは、離婚そのものを否定しておられるようです。けれども、他の新約聖書の個所を見ると、聖書の教えに則った解釈がはっきりとわかります。

特定の状況における離婚は正当に用意されています。ですから、離婚歴のある人を決して咎めてはいけません。

離婚では双方が傷つきます。結婚は強力接着剤でくっつけるようなものだということを知っておく必要があります。

瞬間強力接着剤でくっつけたものをはがそうとすると、くっついていた両方の面がダメージを受けます。

離婚を経験した人には、私たちの批判ではなく祈りが必要です。

いずれにせよ、今日は離婚について学んでいるのではありません。今日学んでいるのは、離婚などあらゆることがなぜ起こるかについてです。

そこに隠された問題は、頑なな心です。

パリサイ人は、神の律法に従うことより、律法の抜け穴を見つけることに一生懸命でした。

これこそ、頑なな心のあらわれです。

心の頑なな人は、神のみことばの明確な教えを差し置いて、自分の権利を行使しようとします。

そのような人は、聖書が実際に教えることよりも、聖書の教えに関する自分なりの解釈を優先させます。

ある著名な新聞記者は、事実などない、あるのは状況におけるひとりひとりの受け止め方だけだ、と言いました。

これがパリサイ人の問題でした。

彼らは、自分の都合の好いように、モーセの言葉を曲解しました。

それは、彼らの心が頑なだったからです。

イエスはここで、頑なな心の持ち主は、神の御国に決して入れないとおっしゃっています。

私たちの心の状態はどうでしょうか。

2. 謙虚な心の必要性。(13-16 節)

13-16 節で、イエスは弟子たちに謙虚な心の必要性を教えておられます。

9 : 36-37 でも、イエスはすでに子どもたちを例にとり、しもべとなることについて教えられました。

この個所では、弟子たちは、祝福してもらおうと子どもをイエスのもとに連れてきた人たちを叱っています。

弟子たちは、子どもたちがイエスほどの偉いお方の手を煩わせてはいけなと考えたのです。

けれども、それは間違っていました。

弟子たちの行為は、彼らが弟子としての生き方を理解していないことを露呈していました。

ここで教えられている真理を、私たちもしっかり自分のものにしなければなりません。

15 節に注目してください。

この個所を、原語のギリシャ語から訳してみたいと思います。

ギリシャ語訳は次のように語ります。

「子どもを受け入れるように神の国を受け入れない人は、そこに入れません。」新改訳は、「子どものように」と訳しています。

それはほんの少しの違いですが、意味と解釈は大きく変わってきます。

クリスチャンは子どものように行動しなければならないと思っている人がいます。つまり、子どもの特徴を帯びるということです。

この個所が言っているのはそういうことではありません。

ここで語られているのは謙虚さです。当時、公共の場で子どもたちと一緒に過ごすのはとても卑しいことでした。

謙虚になって、子どものレベルに合わせる必要があります。

ですから、イエスは弟子たちに、神の国に入りたい者には謙虚さが必要だと教えておられたのです。

人がクリスチャンにならないおもな理由のひとつが、謙虚さの欠如です。

たいていの人には自分の罪や過ちを認めたくありません。また、今この地上で生きている間も死後も救い主が必要だということを認めたくありません。

自ら謙虚にならなければ、神はあらゆる状況をとおして私たちを謙虚にさせられることがあります。私の場合、25歳のときにそういうことがありました。

つらい経験でしたが、そのことで神に立ち返ることができたので、感謝しています。

神によって謙虚にさせられるのは、自ら進んで悔い改めて信仰をもって神の前に出るよりも、ずっとつらいことです。

3. 私たちの内側で神に大きく働いていただく必要がある。(17-26 節)

今日ここまでで学んだふたつの出来事は、今まで学んだすべてのことを再確認させてくれるお話で締めくくられています。

17-22 節で、イエスは裕福な青年と話をなさいます。

この青年は、裕福で年も若く、権力も持っていました。しかし、永遠のいのちをいただいているという確信がないことに気づきました。

それで青年は、イエスにとても大切なことを尋ねました。

「尊い先生。永遠のいのちを自分のものとして受けるためには、私は何をしたらよいでしょうか。」

18 節で、まずイエスが青年に教えられたのは、神の前に尊い人などいないということです。

それから、十戒を持ち出されます。

青年が、少なくともひとつは守らなかったことがあると認めることを望んでおられたのでしょうか。しかし青年は、「先生。私はそのようなことをみな、小さい時から守っております。」と答えました。

イエスは彼の心もそれまでの生き方もすべてご存知です。

イエスは彼を見つめ、その人をいつくしんで言われました。「あなたには、欠けたことが一つあります。…」

そして、最大の問題を指摘されました。

それは、彼の富でした。

イエスは青年に、財産を捨てて自分の十字架を負い、イエスの弟子となるようにとおっしゃいました。

青年は、そのようなことを要求されてまでイエスについていく気はありませんでした。

彼は、イエスのおっしゃることを聞いてついていこうとはせず、立ち去りました。

自分の富にしがみついた青年には、自分を捨ててイエスについていく覚悟はありませんでした。

彼は、この世の物を得て、自らのたましいを失ったのです。

マルコ 8:36 人は、たとえ全世界を得ても、いのちを損じたら、何の得がありません。

23-27 節で、この青年とのやりとりについてイエスと弟子たちが語り合っています。

弟子たちは、らくだが針の穴を通るというイエスのたとえに驚いていました。

イエスは弟子たちに、奇跡によってのみ神の御国に入れるということを教えようとなさっていたのでしよう。

ヨハネの福音書 3 章から、神の聖霊によって「新しく生まれる」ことは奇跡であるとわかります。

私たちの頑なな心が謙虚な心に変えられ、すべてを捨ててイエスについていく覚悟を決めると、神は奇跡を起こしてくださいます。

最後に

今日は、頑なな心の危険性について学びました。頑なな心は、神の御国に入ることに関するイエスの教えに心を開きません。

頑なな心は、聖書の権威に人生をゆだねることを嫌います。頑なな心は、思い通りに生きることを求め、己を人生の主とします。

今日私たちは、謙虚な心の必要性についても学びました。

謙虚な心は、過ちを認めることをいとわず、神の御国に自力で入れるような善良さが自分にはないことを認めます。

心を変えてもらうには、奇跡が必要です。

最後に、神だけが聖霊によって私たちの心に大いなる働きをなせるお方です。

私たちに必要なのは、新生による新たな心です。

あなたの心の状態はどうですか。

すでにクリスチャンであっても、常に謙虚な心でいなければなりません。